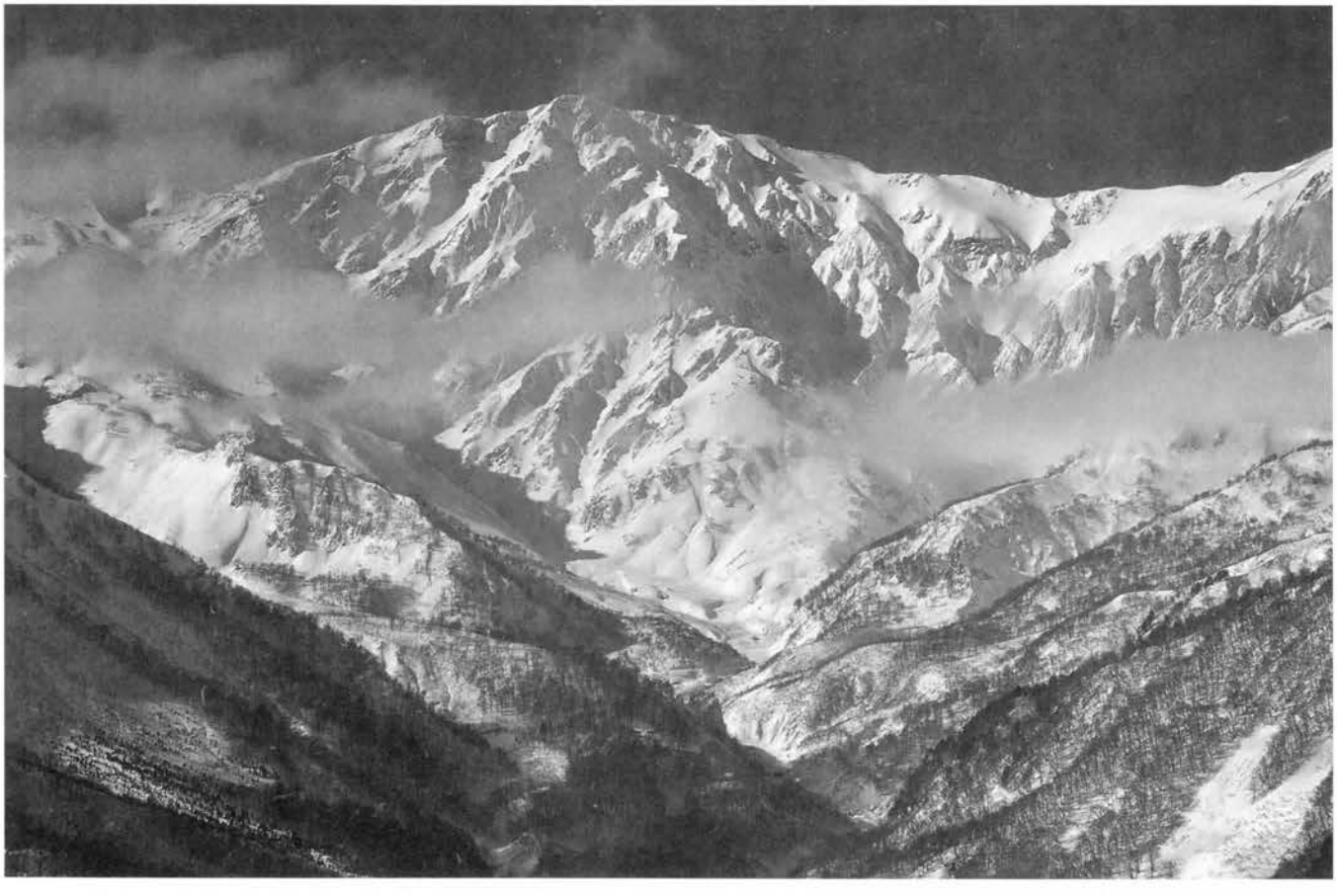
① 毎月25日発行

山と博物館

第５１巻　第４号　２００６年４月２５日　　市立大町山岳博物館

特別展「菊池哲男写真展 白馬 SHIROUMA」特集号

会期：平成18年4月15日(土)～5月28日(日)　※4月17･24日、5月8･15･22日は休館



「崇高なる白馬岳(1月)」　　撮影　菊池哲男

開催にあたって

市立大町山岳博物館

山岳フォトグラファーの菊池哲男（きくちてつお）氏は北アルプスの白馬岳や五龍岳、鹿島槍ヶ岳そして針ノ木岳へと続く後立山連峰に魅せられ、十五年以上も撮影を続けています。長期にわたって撮りためた作品で昨年、写真集『白馬』を出版されましたが、今回の作品展では写真集の中から一mを越す大パネルを多数展示するほか、新たな試みとして近年急速に普及しているデジタル一眼レフカメラによる最新の作品も複数、大パネルで展示します。ぜひ大迫力のオリジナルプリントで日本を代表する高き峰々が魅せる四季折々の美しさを堪能してください。

菊池哲男氏プロフィール

山岳フォトグラファー。好きな絵画の影響で十四歳から独学で写真を始め、これまで山岳雑誌、カレンダー、ポスター等に多くの作品を発表。

九九年に初の写真集『美しき山稜』刊行。○一年月刊誌『山と溪谷』の表紙を一年間担当する。○四年よりニコン・フォトコンサルタントとして写真教室や撮影ツアーの講師など活動の幅を広げている。

○五年には写真集『白馬』（山と溪谷社）を上梓し、池袋サンシャインにて写真展を開催。三日間で三万人を動員した。

HP:http://www.t-kikuchi.com/

白馬 SHIROUMA

菊池哲男

白馬岳の位置的概略

北アルプスの最北部に位置する白馬岳は標高二九三二mの高峰である。「岩と雪の殿堂」として知られる北アルプス南部の槍・穂高連峰に対し、日本屈指とも言える高山植物の宝庫であることから「北アルプスの女王」と称され、親しまれている。

この白馬岳を信州側の白馬山麓や各尾根から望むと南の杓子岳（二八一二m）、白馬鑓ヶ岳（二九〇三m）とともに仲良く三座が並び、これらを総じて白馬三山と呼んでいる。また、この白馬岳から針ノ木岳あたりまでを富山県側から見て立山の後ろにあるという位置関係から後立山連峰と呼んでいたが、最近ではその名称をあまり聞かなくなった。この小蓮華山から白馬三山と唐松岳、五竜岳そして鹿島槍ヶ岳にかけて東（長野県）側が急峻で西（富山県、新潟県）側が緩やかという非対称山稜が顕著に見られる。静岡から糸魚川へ至る大断層フォッサマグナと冬の大量の積雪がもたらす浸食作用により、これらの地形的特長とその結果、高山植物の楽園が形成されたと考えられている。

白馬岳の稜線は北の三国境で二分し、一つは小蓮華山方面へ、そしてもう一つは鉢ヶ岳から雪倉岳、朝日岳を通って北上し、最終的には犬ヶ岳から白鳥山を経て日本海の親不知へと一気に落ち込んでゆく。一方、白馬三山の南部は天狗ノ頭から天狗ノ大下りを経て不帰ノコルに出て、ここから不帰Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ峰の嶮を小刻みなアップダウンを繰り返して唐松岳、五龍岳、そして深い八峰キレットを通って鹿島槍ヶ岳へと向かう。さらに爺ヶ岳で進路を西に変え、篭川を囲む馬蹄形のように岩小屋沢岳や赤沢岳、鳴沢岳、スバリ岳、そして針ノ木岳を通って針ノ木峠に達する。反対側に登り返せば、コマクサの大群落で知られる蓮華岳の山頂だ。

「残雪の五龍岳（11月）」ニコン D2x/ デジタル作品

山と写真

野球と絵を描くことが何よりも大好きだった小学校時代。しかし、たまたま見たオランダの画家ゴッホの画集で月や星が渦を巻くように不思議な光を放つ「星月夜」に心を揺さぶられ、星に興味を持つようになった。六年生のときには親にねだって天体望遠鏡を買ってもらい、月や惑星、星団などを観測し、中学二年の時には念願だった三五mmの一眼レフカメラを手に入れ、ちょうど現れた大彗星（コホーテク彗星、ウエスト彗星）の撮影に没頭した。そして高校へ進学。東京下町の夜空もしだいに明るくなり、もっと星がきれいに見えるところへ行きたいとたどり着いたのが山だった。

初めの頃こそ、山へ自作のポータブル赤道儀付き望遠鏡を持ち込んだが、山岳部の顧問であった担任に連れられ、谷川岳へ登ったことをきっかけに、何時の日からか、山そのものが対象となっていく。十七歳の夏には高校の仲間三人と白馬岳をテントで縦走し、北アルプス三〇〇〇m級の山を初体験。その後、大学時代はロッククライミング、雪山に山（バックカントリー）スキーと興味の赴くままに山の世界を広げていったが、いつでも心のベースにあったのは、雲海に浮かぶ白馬岳山頂で迎えた感動的な夜明けだった。そして山における様々なジャンルに対し、その時々で興味の対象が変わってもいつでも変わらなかったのが、写真＝〝山を写すこと〟であった。

それからは山を撮るために山行を続け、今日に至っている。

「桜咲く白馬山麓（5月）」ニコン D2x/ デジタル作品

白馬岳の花

白馬岳を語るのに高山植物は欠かせない。白馬岳一体では、高山・亜高山植物の種類は

「雲表の白馬岳・杓子岳(8月)」ペンタックス67/ フィルム作品

「栂池寸景(10月)」ニコン D2x/ デジタル作品

約三五〇種にのぼり、一説によると日本全体に産する高山植物の約八割が見られるというから驚きだ。また種類の多さだけでなく、お花畑と称されるほど大きな群落をあちらこちらで見せてくれる。白馬岳はまさに花の王国であり、それが北アルプスの女王といわれる由縁である。

五月、猿倉や栂池自然園にて雪解けとともに新緑が芽吹きするころ、山麓では一足先に花の季節を迎える。六月、標高一九〇〇mの栂池自然園ではミズバショウとリュウキンカがいっせいに花開き、標高一五〇〇mの白馬尻ではキヌガサソウやシラネアオイが大きな花をつける。この頃、白馬岳の稜線ではトップバッターとしてツクモグサが淡い黄色の花を開き、やがてウルップソウやチングルマ、そして高山植物の女王コマクサなどが続く。

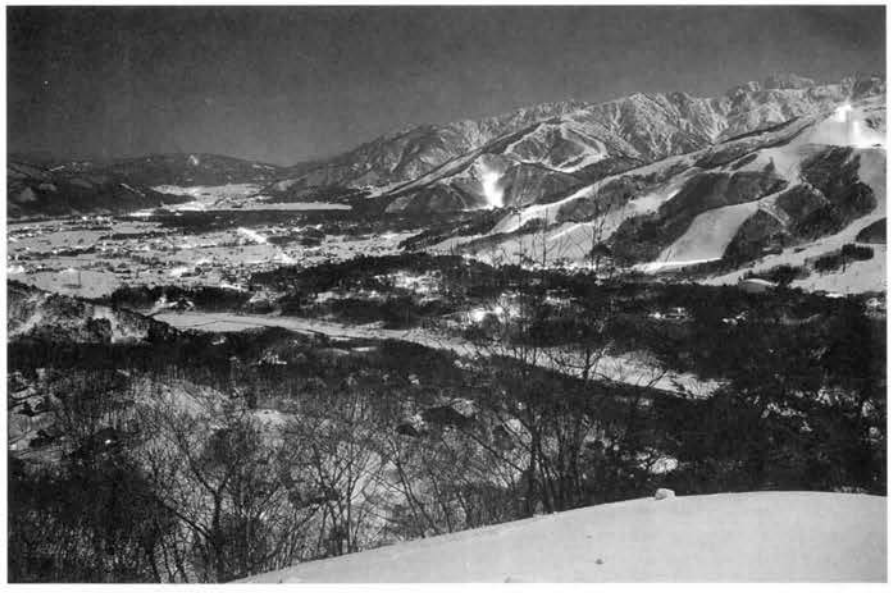
七月、白馬大池西側の湿地帯ではハクサンイチゲの白い群落に続き、ハクサンコザクラの赤く可憐な花が人々の目を楽しませてくれる。また数年に一度は白馬大池湖畔や栂池自然園、種池平などでコバイケソウの大群落が見られることもある。白馬岳は山頂付近までコマクサやミヤマアズマギク、チシマギキョウ、イブキジャコウソウなどの高山植物で埋め尽くされ、白馬山荘直下の大斜面はシナノキンバイやミヤマダイコンソウ、ハクサンイチゲなど色とりどりに咲き乱れるお花畑となる。白馬鑓ヶ岳東面のカール末端にあたる大出原には七月下旬の雪解けとともにハクサンコザクラやシナノキンバイなどが咲きそろい、やがて八月中旬頃にはクルマユリとハクサンフウロのお花畑を展開させて、短い夏を終える。

静夜の頂

『山と溪谷』八〇〇号記念号に掲載されたグラフ「静夜の頂」は、夜の山と街の明かりをミックスした作品で、各方面の関係者より「今までにない新鮮な作品だ」とご好評をいただいた。また読者の女性から思いもよらずファンレターまで受け取り、そこには「山にはそれまで全く興味はなかったけれど、たまたま立ち読みして見たこの写真に感動して初めて山の雑誌を買ってしまった」と記してあった。常に観る人の心に残る作品作りを心がけている作家としてこれほどの賛辞もないかもしれない。

「静夜の頂」は、白馬岳を中心とした山岳風景とともに思い入れのあるもう一つの重要なテーマでいつの日か、このテーマで写真集をまとめたいと思っている。夜の撮影は一枚の撮影時間が通常の一秒以下と違って数分から数時間と極端に長く、待ち時間の長い孤独な作業であるが、元来、星＝宇宙に興味がある私にとって、この星空との語らいはとても至福なひとときで、結局朝まで寝ずに撮影ということもよくあった。

山へ登るきっかけとなった星夜への憧れ。これからも単なる星の写真ではなく、自分にしか撮れない「静夜の頂」を一つのテーマとして追い続けて行きたい。



「月光浴の白馬村（2月）」ニコンD200/デジタル作品

写真集『白馬』出版

白馬岳は不思議な山だ。まずはその呼び名。白馬と書いてシロウマと読む。しかし、JR大糸線の駅名も白馬（ハクバ）駅で、村の名前も今は白馬（ハクバ）村でシロウマと読ませるものは山に関係するもの以外にはない。

春、雪解けの季節に、長野、新潟そして富山の県境である三国境の南面に、苗代の時期が来たことを知らせる黒い岩の馬形が現れる。これが農事に役立つ自然の暦として山麓の人々に広がり、そこからこれを代掻き馬に見立てて代馬（シロウマ）と呼んだ。そしてこの「代」が誤記によって「白」と当て字され、白馬＝シロウマと書かれ、呼びやすいハクバとなったという説は有名である。しかし、かなり古い文献にすでに白馬＝ハクバと書かれたものもあるといい、正確なところは今もわからない。

北アルプスでも屈指と言える高山植物の宝庫であることから北アルプスの女王と呼ばれるが、少なくとも信州側から見上げる白馬岳はちょうど東面にあたり、イメージとは裏腹に山頂から一気に切れ落ちる山容はとても男性的である。

そんな白馬岳に初めて登ったのは確か十七歳の夏。高校の仲間三人と大雪渓を登り、白馬大池を経由して蓮華温泉に下山するという三泊四日のテント山行だった。もう四半世紀も前のことだが、初めて登った北アルプスの山で、しかも三〇〇〇m級ということもあってその印象は強烈だった。しかし、その後はバックカントリースキーの対象とすることが多く、本格的に写真の対象として考えるようになったのはずっと後の一九九〇年ころだったように記憶している。きっかけは狙っていた白馬大池が解氷する作品が撮れたことだった。

普通、アーティストならば花火のように一気に開花する、太く短い人生に憧れるものかも知れない。しかし、私はじわじわと一歩ずつ、でも確実にステップを踏んで生きたい。悠久の刻を超えてそこに在る山だから、たとえ細くても長く対峙したいのだと思う。大好きな山だからこそ、最も美しく輝く瞬間を作品として残したい。そのために光を待ち、雲を待つ。作品に命を吹き込むための努力は惜しまないつもりだ。

この写真集『白馬』は十年以上という長い年月をかけ、熟成に熟成を重ねて世に送り出すものである。この一冊だけで山岳写真作家としての力量を問われると思うと少し怖い気もするが、逆にどんな反応があるかとても楽しみでもある。ここには確実に「菊池哲男の世界」があり、全てが紛れもない私の足跡である。そんな白馬岳への熱い思いを写真集という形にできたことをとても幸せだと思っている。（『山と溪谷』二〇〇五年七月号より）

市立大町山岳博物館展によせて

長野県の大町市や白馬村・小谷村は富山県側から見て立山連峰の後ろにあることから名づけられた後立山連峰の表玄関です。この連峰には白馬岳をはじめ、五龍岳や鹿島槍ヶ岳、爺ヶ岳そして戦国武将・佐々成政の針ノ木峠越えで有名な針ノ木岳など個性的な秀峰が続き、この大町山岳博物館前から全てを見渡すことができます。里から三〇〇〇mの山々がこれほど近くに迫る山岳風景はまさに圧巻で、そんなすばらしい会場で私の作品展を開催できるというのは無類の喜びです。

今回の作品展では写真集の中から一mを越す大パネルを多数展示するほか、新たな試みとして近年急速に普及しているデジタル一眼レフカメラによる最新の作品も複数、大パネルで展示を予定しています。ぜひ一人でも多くの方にご来場いただき、私の作品を通して山岳という大自然と向き合い、その大切さを実感していただけたら幸いに存じます。

（山岳フォトグラファー）

資料の寄贈ありがとうございました

当館の収蔵資料充実のため、平成十七年度中あらたに次の博物館資料を寄贈いただきました。心より厚くお礼申しあげます。

フリッチ製ピッケル（部分）一点……個人（奈良県）
冊子『マナスル登頂と毎日新聞』一点……個人（埼玉県）
ヒマラヤ高峰九座の岩石九点……個人（群馬県）
山内製ピッケル・アイゼン二点……個人（東京都）
登山関係新聞切抜など十三点……個人（白馬村）
ナンガパルバットの岩石一点……個人（群馬県）
山岳関係図書など八九六点……個人（東京都）
書籍『山木魂』一点……個人（東京都）
マナスルの岩石一点……個人（東京都）
ローツェ山頂の石一点……個人（群馬県）
登山日記帳一点……個人（東京都）
ホシガラス剥製一点……個人（安曇野市）
スキーシール一点……個人（東京都）
山岳関係図書八二点……個人（奈良県）
スキーシール二点……個人（東京都）
灯油・ガソリンストーブなど一〇点……㈱エバニュー（東京都）
（大町山岳博物館）

山と博物館　第51巻　第4号
二〇〇六年四月二十五日発行
発行　〒398-0002 長野県大町市大町八〇五六―一
市立大町山岳博物館
TEL　〇二六一―二二―〇二一一
FAX　〇二六一―二二―二二三三
E-mail:sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL:http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/
印刷　㈱奥村印刷
定価　年額一、五〇〇円（送料含む）（切手不可）
郵便振替口座番号〇〇五四〇―七―一三三九三

R100 PRINTED WITH SOY INK この「山と博物館」は再生紙を使用し、石油溶剤の代わりに大豆油を使用した大豆インキで印刷しています。